

論文要旨

論文題目 スピノザにおける観念の形而上学

申請者 榮福 真穂

論文要旨 (日本語で、6000字以内)

本研究は、17世紀オランダの哲学者バルーフ・デ・スピノザの観念説を、とりわけ形而上学の文脈から明らかにするものである。以下、本研究の背景および議論の手順を示すことで、博士論文の要旨とする。

1. 研究の背景

スピノザの生きた17世紀は、一般的に、近世哲学への移行を迎える時代であると理解される。こうした根本的な転換は、本研究が中心的に対象とする“idea”概念にも反映されており、それによって“idea”すなわち「観念」は、中世とはまったく異なった意味内容を指示するようになった。この決定的な意味の転換をもたらしたのは、デカルト(1596-1650)だと言われている。デカルト以前には“idea”は世界創造に先立って神の知性が捉える「範型」を表現するために用いられていたのに対して、デカルトは、それを人間精神の知性的はたらきに関わるものを表すために用いた。この「転換」のポイントは、“idea”による認識の適用範囲が神的知性から人間知性へと引き下ろされたことにあると言える。このことによって、“idea”は私たちが抱く「考え」や「イメージ」、まさに「アイデア」に相当するような現代の用法に通ずる意味内容を初めて獲得したのである。このような経緯を持つ「観念」は、17世紀哲学における最重要概念と言っても過言ではない。17世紀の哲学者たちは、「観念」という登場したばかりの新しい道具を各々が自らで陶冶しつつ、それをを用いて自らの思想を表現しようとした。観念に関する理説を、本研究では「観念説」と呼ぶ。「観念説」について、ナドラーの表現を借りつつ規定するならば、それは17世紀の哲学者たちによる、観念という語を中心に用いつつ「精神と世界とはどのように出会うのか」に答えようとする理説のことである。

スピノザもまた、こうした近世という時代に、やはり“idea”の概念を使って自らの思想を展開した一人である。彼には独自の観念説と呼ぶべきものがあっただろう。たとえ

ば私たちは、観念を「絵画に墮さしめないように」という彼の有名な注意を想起することができる。これは、観念と表象像との截然とした区別を意図するものである。また、スピノザは知性や意志も観念に還元してしまう。スピノザによれば、一般に人間の精神的能力とみなされてしまうそれらよりも、観念の方がむしろ基礎的なのである。以上のことから、スピノザは観念についての独自の見解を持っていたこと、また、観念という語にスピノザが託しているものの重さが見て取れる。このように、スピノザには観念説と呼ぶべき理説が明確に見て取れるにもかかわらず、観念説研究においてスピノザは決して主流に位置する思想家としては取り扱われてこなかった。それは言及される場合もごく一面的な説明にとどめられるのが常であるどころか、完全に黙殺されてしまうこともしばしばである。このことは、哲学史の教科書においては多くの場合スピノザが比較的大きな位置を占めることと対比すると、奇妙なことに映る。スピノザには、独自の「観念説」と呼ぶべきものがあるのは明らかだからだ。ただしスピノザの観念説は、人間の認識論を超えた射程を持っており、この特殊さゆえに、ある種扱いづらいものとなっている。スピノザの17世紀的な枠組みからも逸脱した特殊な観念説を理解することは、未だ十分に議論し尽くされていない、豊かさを含んだ課題である。

2. 本研究の構成

では、スピノザの独自の観念説の内実はどうのようなものだろうか。これが本研究の問いである。この問題を考えるにあたり、本研究はデカルトの観念説から出発する。上述のように、スピノザはデカルトの影響下で自らの思想を展開しているからである。しかし、デカルトの観念説の内実はそれほど明らかになっていない。それゆえ本研究では、デカルトの観念説の内実を解明することから出発し、これをスピノザの観念説の独自性の解明のための基礎とする。

本研究の構成は以下である。

第1部では、デカルトにおける観念説の内実を、観念の持つ二つの側面に着目して明らかにする。デカルト哲学において、主観的な領域から客観的な領域への超出のための梃子の役割を観念に見出すことは、『省察』解釈においてきわめて一般的な傾向である。そうした解釈は多くの場合、第三省察における神の實在のアポステリオリな証明を主座とする。解釈者たちが指摘するように、そこでは「考える私」が持つ神の観念の内容の確かさが、その原因である神そのものの存在の確かさを保証するのであり、端的に言えば観念から存在への道行が見て取れるのである。この道行において明示的に重要な役割を果たすのが観念の対象的事象性であり、私たちは第1章でこのことを詳論するだろう。だが当該の証明においても、観念はその対象となる存在すなわち外的事物と区別された上で関係づけられるだけでなく、観念それ自体がある種の「存在」を与えられている。このことは明示的な仕方ではないにせよ、実は重要な意味を持っている。この従来あまり着目されてこなかった論点について論じるのが、筆者のデカルト理解の核心である

(と同時に、この論点はスピノザの観念説を理解するために必要な前提をなす)。第2章ではこのことを論じる。最後に、第1部第3章では、デカルトの影響下で観念説を展開したマルブランシュ、アルノー、ロックの立場を、観念の二面性のどちらを重視したかという観点から整理し概観する。その上で、これら「ポスト・デカルト」の観念説の文脈の中でスピノザがどのように位置づけられるかを考察する。

第2部では、デカルトの二側面的な観念説を引き継いだスピノザが、そこからどのように逸脱し、独自の観念説を展開しているかを明らかにする。ここでポイントとなるのは、スピノザはデカルト的な観念の二面性を受け入れつつも、デカルトとは反対に、観念の対象的側面よりも形相的側面を強調している点である。しかし上述したような事情、すなわち観念の存在の問題は看過されがちであるという事情は、スピノザ研究にも当てはまる。スピノザの観念説が非常に特異なものであることは、とりわけ真理論の文脈においてよく取り上げられる。例えばアルキエや上野によるスピノザ哲学の概説書においては、彼独自の真理論との関連において観念への言及がなされている。ごく簡単に言えば、スピノザの真理論はいわゆる「対応説」を採らず、真なる観念の内的な徴標によって真理性を担保するという方策を採る点に特徴がある、といったものである。このような認識論的・真理論的側面は、たしかにスピノザの観念説の特筆すべき一側面であることは疑い得ない。しかし、観念の真偽が問題となるよりも手前の問題、そもそも観念とはいかなる存在であるのかということもまた、とりわけスピノザにおいては重要な問いとなる。というのも、スピノザにおける観念は必ずしも人間が心において持つものではなく、人間の心とは独立に、まず神のうちにあるものだからだ。スピノザにおいて神のうちにあるということは、同時に実体ないし世界のうちにあるということでもある。第一義的に神ないし世界のうちに「ある」観念のあり方は、観念説の存在論的観点からの解明を必然的に要請するものである。

こうした背景・研究状況を踏まえ、第2部においてはスピノザにおける観念それ自体の存在の問題が主題となる。ここで取り組むのは、スピノザにおける「観念」の存在論的身分は何か、という問いである。その答えは、端的に言えば、観念は「思惟様態」であり、言い換えればそれは「個物」であり「事物」なのだ、ということである。この答えそのものは『エチカ』を読めば容易に取り出してこられるものであるように見えるが、観念が思惟様態であるということがどういうことか、また、その具体的内実やそこから何が帰結してくるのかはそれほど自明ではなく、先行研究によっても明らかにされていない点である。本研究では、観念説の二側面的な枠組み自体は比較的忠実にデカルトを踏襲しているスピノザが明確にデカルトから逸脱する点として、観念が思惟様態であり事物であるという主張とその含意を精確に捉えることを試みる。まず4章では、デカルトと共有された「形相的」「対象的」という対概念が、スピノザの観念説においてどのように用いられているのかを明らかにする。そこでは、それらの概念が平行論という独自の体系の成立において重要な役割を果たしていることが明らかになる。次に5章では、

そうして成立する平行論とはいかなる体系であるのかをより詳細に見ていこう。そこでは、スピノザの平行論的体系にとっては、個々の人間精神によるその都度の認識にとどまらず、体系全体において「一致」が成り立っていることが重要だということが明らかになる。それゆえスピノザの観念説は必然的に形而上学的にならざるをえないのであり、このことはスピノザの観念説の一つの特徴を成しているのである。6章では、前章で明らかにしたような『エチカ』の平行論的体系のうち、もう一つの重要な要素である因果的独立性に着目し、これが観念説にどのような帰結をもたらすのかを考察する。そこで私たちは、第1部の議論を踏まえてデカルトと比較することで、スピノザにおいては、観念も物体的事物とまったく同等に「事物」であるとみなされているという点に、スピノザのデカルトからの大きな逸脱を見出す。

第3部では、観念説の存在論的側面を主題とした第2部の探究を踏まえ、スピノザの観念説の認識論的な側面に光を当てる。第2部で明らかにされるように、スピノザはデカルト的な観念の二側面のうち、形相的側面を強調したのに対し、対象的側面の意義はデカルトの場合よりも見えづらくなっていた。4章では対象的側面が「認識論的な地平を拓く」ものとして意義づけられるが、第3部では、まず体系レベルで打ち立てられた認識論的土台の上に、実際にいかにして個別的な認識が成立するのかを見ていこう。7章では、「存在しない個物の観念」の存在論的身分を明らかにすることによって、E2p7およびE2p7cにおいて成立した体系レベルでの平行関係が、その後いかにして個々の事物の水準へと適用されるのかを見ていく。このことを通じ、観念と「对象的有」との言い換えがなされる際のある条件が浮き彫りにされるだろう。さて、このような体系的な一致およびその個物への適用のみからは、私たちにとって最も身近な観念とも言える「虚偽の観念」は説明されえない。平行論の体系においていかにして虚偽の観念は生じるのか、そしてスピノザはどうすれば虚偽ではなく真なる認識を獲得できると考えたのか。最後に8章では、こうした認識論的方法論の問題について、ふたたびデカルトと比較しつつ考察する。そこでは、大掛かりな形而上学的体系によって基礎付けられるスピノザの認識論の、意外なほど実践的なあり方が浮かび上がってくるだろう。

ここで、本研究第2部および第3部が対象とする『エチカ』の読解範囲について述べておく必要がある。というのも、本研究でスピノザの観念説のすべての側面を扱うことは不可能だからである。たとえば、十全な観念を十全たらしめる真理の内的徴標という、従来盛んに論じられてきた論点を、本研究は主題的に扱わない。本研究はそういった認識論的側面だけでなく、観念の存在論的な側面に光を当てる。本研究がとりわけ着目するのは、『エチカ』において観念の二面性が平行論的体系の導出に深く関わっているという点である。本研究は、『エチカ』における平行論の導出（第2部定理5から同定理7まで）に際して観念の二面性が果たす役割を詳しく論じ、ここを『エチカ』読解の出発点とする。この平行論的体系の理解に基づいて、議論は二つの方向へと展開する。一つは、E2p5に顕著な観念の特徴、すなわち観念同士で因果系列を形成するという特徴に

着目し、観念の様態あるいは事物としての存在論的身分をさらに追究する議論（第1部定理34から同定理36まで）である。もう一つは、体系における平行関係の個物の水準への適用（第2部定理8および同定理9）を経て、ある特定の個物すなわち人間の認識により一層直接的に関わるような議論（第2部定義3、第2部定理10から同定理35）である。本研究は、前者の議論を第2部で行い、後者の議論を第3部で行う。これによって、先行研究がいまだ十分に明らかにしていない、スピノザの観念説の形而上学的な側面を明らかにしたい。とりわけ未解決のまま残されている、しかし重要な問題は、『エチカ』の平行論的体系と真理論との接続の問題である。本研究は最後にこの問題に取り組んでいく。

本研究はこうした概念史研究の観点からスピノザの観念説に取り組むことで、従来の研究に欠けていた一片を提供できるものと信じる。さらに、「観念」の概念史上においても異端に見えるスピノザの観念説を起点とすることで、彼の哲学全体を唯物論と観念論との間でどのように位置づけうるかということも浮き彫りになってくる。スピノザの体系は死後、ときに唯物論の体系として、ときに観念論の体系として（いずれにせよ多くの場合批判的に）受容されてきた。しかし、本研究を通じて見えてくることは、スピノザの体系はそのどちらでもないということである。私たちは結論において、スピノザの体系を「観念の実在論」の体系であると名付けるだろう。本研究はデカルトという参照軸を用いることで、スピノザの観念説の特異性、ひいてはそれを成立させているスピノザの形而上学的体系そのものの特異性もまた、明らかにしようと目論むものである。